

無明塾とわたし

中野孝次

縁というものはたしかにあるもので、わたしと浄運寺の無明塾との関係も、まさにその縁の不思議がつくりなしたものだ。

わたしが初めに無明塾に話しに出かけたのは、秋山駿とのつながりによつてだったと思う。秋山のお母さんの実家が浄運寺で、秋山はその数年前から無明塾に関わっており、彼に誘われてわたしも話しにいったのだ。

初めは一回こっきりのつもりで行った無明塾を、それから十数年、今年の七十七歳を以てやめるまでつづけようなどと、まったく思いもかけぬことであつた。わたしは浄運寺以外の講演はすべて断っており、よそで講演することはなく、話すのはこだけである。しかもそれが十数年もつづいたのだから、よほどに縁があつたにちがいない。

一つには無明塾の主催者、浄運寺住職の小林覚雄氏の志と、毎度心のこもつたもてなしによる。

いまだきお寺で、みずからの発案と出費で、人を呼び、こういう文化講演会を催そうなどとする所が、ほ

かであろうか。わたしはその志に感じ入つた。

その上この住職は、誘い上手、もてなし上手である。寺にいろいろあじゅうの気くばり、そのあとの飲食や宿のもてなし、毎度それは実に行きとどいたものであつた。わたしはその情にほだされたと言つていい。

また、相棒の秋山駿、窪島誠一郎と、年に一度この寺で会うのもたのしみであつた。秋山とは往復の列車も一緒で、一年間会わなかつたあいだのつもる話をしゃべりまくつた。

が、十数年経てば、わたしも秋山も老いる。初めは車中ずつとビールを飲み、帰りは上野で降りて池の端の藪でソバを肴に酒をのんだりした。それがここ数年は、ビールさえ飲まず、まして下車して飲むことなどする気にもならず、まことに残念ながら、身体の衰えはいかんともしがたいのである。

しかし、わたしを浄運寺につなぎとめた最大の理由は、毎年聴きにくる熱心な聴衆であつた。毎回、寺の本堂に坐つて、こちらを見つめ、一語も聞き逃すまいとしているような、

この上質の聴衆を前にしては、わたしも全力を傾け、自分の全部を出して話したい気持になつた。今の高校や大学では、まともに講義をきかず、雑談したり、ジュースをのんだり、ケータイを見たりというふうの不愉快きわまる聴講態度の者はかりだと友人から聞いているが、ここはそんな人は一人もいず、全員がしんと、おそるべき注意力で話に耳を傾けてくれるのだった。これでは講師たる者張りきらざるを得ない。

わたしにとつても、そういう熱心な聴衆を前に話すのはたのしかつた。しかも、その熱心な聴衆が年々に増えていったのである。初めは須坂と近辺の人ばかりだったようだが、次第にその範囲がひろがり、しまいは東京、関西、四国などからさえたのために来る人が現れた。これはわれわれの話に関心を持つ人が増えたということ、張り合いが増した。

それにしても、わたしは不思議でならなかつた。わたしが無明塾で話すのは、毎年きわめて固い、くそまじめな話である。人生いかに生きべきかとか、今の世にどう生きるのかとか、さらに今年に死を考えると、う話をした。驚くべきは、そういうごくごくまじめな話を傾ける人たちが、今の日本にもいたのである。信州は昔から教育県といわれ、精

神的な事柄に興味を持つ人が多いといわれているが、それが実証されたのだった。新しく参加する人も今までの人達の熱心な態度に感染して、場の雰囲気気合に合体した。

これは日本にとって希望を持つべき現象だと思われた。二百人、三百人といえ、これだけ質の高い、真剣に人生いかに生きべきかを考える人たちがいるとは、ありがたいことであつた。その思いがわたしをして十数年も無明塾へひきつけたのだと言える。今年は六四〇人だった由。

だが、わたしも今年で七十七歳である。自分では達者なつもりでも、一晩よそに泊つて、人前で話をし、酒を飲んで帰るのは、そのあとにこたえるようになった。また、昔は声のよくとおるのをほめられた自慢の声もかすれ、発声が不明瞭になるのか、ふだん家の中ではしよつちゅう女房に聞き直されたり、聞きまちがえられたりするようになった。これは世間にも迷惑をかけているかもしれない、七十七になつたのをきつかけに今年限りでやめることにした。

そのことが、無明塾(毎年八月の最後の日曜日)の数日前の信濃毎日新聞にてたら、浄運寺には問合せの電話が殺到して大変だったという。これを以て脱退の挨拶とします。

(作家)